

救命技術向上へ症例学ぶ

製鉄記念室蘭病院で検討会



医師と救急隊員が救急搬送について話し合った検討会

製鉄記念室蘭病院（室蘭市知利別町）で16日、救命技術の向上を目的とした救急症例検討会が開かれた。

本年度2回目の開催で、同病院のほか、室蘭市、登別市、白老町、西胆振行政

事務組合の4消防から救急救命士ら計約90人が参加した。

同病院の齊藤淳人小児科

長は生後6カ月～5歳で起きる熱性けいれんについて、発作が止まっても意識がない状態が30分以上続くと脳障害が残り得ると解説し、「（発作の）ガタガタが止まることより意識の回復が大切」と強調した。

また4消防がそれぞれ事例を報告した。このうち登別市消防本部は1歳8カ月の女の子が熱性けいれんを起こした事例を説明。「顔色が悪かったが、酸素を投与するべきだったか」「けいれん発作でかかったことがある病院と（救急の）輪番病院のどちらを優先するべきか」など医師へ盛んに質問していた。（生田憲）